「凍結の楽園」

　春の心地よい日差しの中、若者が草原を歩いている。若者の視線の先には大きな木があり、その木の向こう側に空色のスカートが揺れているのが見える。

　そして、白く細い手が現れ手招きをしている。若者は、はやる心を抑えてゆっくりと歩いて行く。白い手の動きが止まり、長い金髪の乙女が顔を出し、若者に笑顔で叫んだ。
「マイロ、早く」

　若者は、乙女に向かって両手を振りながら大声で応えた。
「わかったよ、リカイ。じゃ、走って行くから」
　マイロは、上着を脱いで腰に巻き、草原を走り出した。都市で生まれ育ったマイロは、草原を歩くことに慣れていない。まして、草の上を走ることなど初めてのこと。

　ほんの少し走ったところで、草に足を取られて前のめりに倒れそうになった。態勢を立て直そうと試みたが、足に力を入れ過ぎたために土と一緒に草を跳ね上げ中に浮いた。そして、地面に叩きつけられた。

　だが、痛みは感じずに妙な冷たさが顔を覆っていた。軟らかく冷たい感触が、全身に伝わっていく。顔を上げたマイロの前には転倒する直前に見た草原ではなく、月明かりに照らされた雪原が広がっていた。蒼く輝く雪原には、大きな木もなくリカイの姿も消えていた。
「リカイ、リカイ。」

　何度叫んでも返事はなく、マイロの声はむなしく雪原に響くだけだった。マイロは、ともかく大きな木があった方向に走りだした。深い雪をかき分けて走って行くと、雪に埋もれた空色の布が有った。彼女を求めて一心に雪を払い退けたが、全く感触がない。凍えて震える指に息を吹きかけて、更に深く掘り進んだ。手が硬いものに突き当たった。

　それは、硬く冷たいガラスの彫像ようだ。マイロは、その正体を探るために横方向に雪を退けていくと、人体のような影が浮かんだ。彫像に付着した雪を取り除いたマイロの目に映ったのは、リカイの姿ではなく、見たこともない女性の姿だった。氷に埋もれた裸体は、凍傷の跡もなく月光を受けて青白く輝いていた。

　マイロが女性の顔のあたりを氷の上から触れると、硬い氷の感触がなくなり、まるで水に手を入れるように抵抗もなく、手首まで入った。さらに奥に手を入れようとしたが、一瞬のうちに氷が融け、体が水の中に引きずりこまれた。冷たい水を鼻と口から吸い込んだマイロは、苦しさにもがいたが、掴むものが全くない。体が水中に沈んでいく。

　目を閉じて絶命を覚悟したそのとき、体にかかる水圧がなくなり、空中を落下していくのを感じた。目を開いて下を見た。先に見た雪原が急速に迫ってくる。マイロは、雪の上に落下した。恐怖と寒さで震えが止まらない。

「落ち着いて、マイロ。寒いのは、あなたの理性のせいよ。雪の中だから寒いはずだと思っているだけよ。力を抜いて肉体の感触だけに意識を集中してごらん」

　その声が命ずるままに力を抜くと、嘘のように寒さが消えた。雪が暖かい、そう感じる。

「そう、寒くないでしょう。こっちを見て」

　氷に埋もれていた女性が立っていた。彼女は、手を伸ばしてマイロの肩を掴んだ。その手は、直接マイロの肌に触れている。服の上から触れているはずなのに。不思議な感触に自分の肩を見た。何も着ていない。マイロは、生まれたままの姿で雪の上にいた。

「マイロ、何も心配はないわ。寒くないでしょ。さあ、こっちへ」

　マイロは、その女性に手を引かれて歩いて行った。しばらく歩いた先には、輝く氷の城があった。城の門は、二人を招くように音もなく開いた。中庭は、全て氷と雪で作られた庭園になっていた。氷で区画された花壇には、草も葉も茎も水晶のようにきらめく花が咲いている。庭園の中央にある鏡のような池には、水ではなく雪を吹き上げる噴水があった。そこから吹き上げられた雪は、氷の幹と枝を持つ木々に積もっていく。

「さあ、横になって。疲れたでしょう。少し休みなさい」

　マイロは、雪と氷が放つ虹色の反射光の中で横になった。見ている風景とは、全く感触が一致しないが、暖かい空気に包まれて深い眠りに落ちた。

　マイロが目覚めたのは、稲妻に打たれたような衝撃のためだった。暗闇の中でマイロを襲った衝撃は、その後もしばらく彼の体を激しく揺すった。苦痛に耐え切れず叫ぼうとしたが、何かが口の中に詰まっていて声が出せなかった。そこで、舌で詰まったものを探ろうとしたが、詰まっているのは自分の舌そのものだった。力を入れて動かそうとしたが、口の中に張り付いてしまってい、口も開けることが出来ない。

　手で口を開こうとしたが、腕も全く反応しない。感触はあるのだが、筋肉が反応しない。やがて、振動が止まり少し落ち着いたマイロは、自分が置かれている状況を思い出した。眠る前の記憶、それは故郷の惑星を旅立つときの記憶。

　人口冬眠に入る直前、愛する恋人がカプセルの中から、自分のカプセルに向けた笑み。マイロは、自分のことより恋人リカイのことが気になり、暗闇の中で彼女が入っているカプセルに目を向けた。そのとき、口中に暖かい液体が流れてくるのを感じた。
　その液体が、氷を融かすようにゆっくりと舌の硬直を解いていく。筋肉もそれに合わせて動き出した。

　ひどくゆっくりとではあるが、周囲が明るくなっていく。口の中に流れてきたのは、外部からの注入ではなく、体液の循環が再開したことによるものだった。まだ、硬直がとれていない首の筋肉を動かして、リカイのカプセルを見たが、変更樹脂で作られたカプセルは黒いままで、再生が始まっていないことを示していた。

　この変更樹脂は、長い間光を見ていない目を保護するために、中にいる人間の再生状況に合わせて色が薄くなっていく仕組みだ。恒星間宇宙船ルコイライは、マイロを含めて乗員300名を乗せて74光年の旅を終え、目的地である惑星ルコイの周回軌道上にあるはずだった。

　まだ、意識がはっきりしないが、マイロは訓練どおり操縦席に着き、惑星観察行動をコンピュータに指示した。しかし、コンピュータは、観測目標の惑星を捕捉出来ずに停止した。

　しかたなく、マイロは船窓の遮蔽装置を解除して、肉眼で観測することにした。だが、窓から見えるはずの青い惑星はなく、真っ白な大地が視界いっぱいに広がっていた。極地に着陸してしまったのだろうか。

　マイロは、船外の大気と現在位置を調べるようにコンピュータに指示した。そして、窓の倍率を上げた。白い風景の遥か彼方に搭のような物を発見したが、吹雪が舞い視界を完全に遮断してしまった。赤外線探査に切り替えようとしたとき、コンピュータの回答が出た。

　現在位置、データにない惑星上。地球からの距離、推定300光年。船外大気は、呼吸可能。気温マイナス15℃、湿度45％。出発してから900年経過していた。

　何が起こったのか、全く理解できないが、船の航行能力を遥かに超えた時間が経過している。乗員300名の冬眠を維持出来るのは、500年が限界だったが、地球と惑星ルコイを往復するのには十分だった。コンピュータの計算が間違っていなければ、マイロは生きてこの惑星に到達しているはずがない。

　なぜ、目的地から大きく外れた惑星に到達したのか。コンピュータに尋ねても「不明」としか答えない。しかし、どうして航行能力を大きく上まわる旅が出来たのか、コンピュータはその疑問に冷酷な答えを出した。

　航行能力の限界に達した船を維持するために、可能な限りエネルギーの消耗を避けた。コンピュータは、最もエネルギーを消耗する冬眠装置を一人ずつ無作為に停止していったのだ。そして、最後の一人になったとき、人類が呼吸可能な大気を持つ惑星を発見した。そして、コンピュータはマイロを覚醒させた。

「リカイ」
　マイロは、リカイが眠っているはずのカプセルに駆けつけた。
「リカイ・・・」
　偏光樹脂を通して見えたのは、若く美しい彼女ではなく、白骨化した遺体だった。

　この船に乗るために受けた過酷な試練と訓練、新天地でリカイとの希望に満ちた生活。その全てが消え去った。そして、船の動力が限界に達していることが、ゆっくりとした死を彼に突きつけている。しかし、自分のことより恋人を亡くしたことに絶望したマイロは、操縦席に戻り窓から絶え間なく降り注ぐ雪を見つめた。

　やがて、外が暗くなり惑星の夜を迎えた。一度真っ暗になった風景に青い光が差し込む。それは、この惑星の月からの光だった。雪原は、蒼く輝いた。未知の惑星なのだが、その光景はなぜか懐かしい。マイロが育ったのは、温暖でめったに雪が降らない地域だった。だが、故郷に戻ったような不思議な気持ちがする。

　月明かりに誘われるように、船外に出たマイロは、遠くで手を振るリカイの姿を見つけた。これは、幻影なのか。それとも冬眠中の夢なのだろうか。どちらにしても、ここに座っていても何も解決しない。
「リカイ、今いく」
　船を飛び出したマイロは、深い雪の中をリカイ目指して進んだ。しかし、彼女に手が届きそうになったとき、その姿が青白い風景に溶け込むように消えてしまった。
「いったい、どうしたって言うんだ」
　マイロは、月に向かって叫び雪の上に倒れた。息が切れる。冬眠から覚めたばかりの体は、急激な運動に耐えられなかった。心臓と肺が破れそうだ。喉が渇く。水、そうだ雪だ。マイロは、一握りの雪を口に入れた。雪は水となり、喉が潤う。少し落ち着いたマイロは、月光を手で隠し、澄んだ夜空を視界の端から端まで目で追った。そして、服に付いている通信機をオンにした。
「あれは、カシオペアか。少し形が違う。星座の形が変わるほど、遠くに来てしまったようだ」

　もう立ち上がる力がない。今の通信を誰かが聞いて、ここに自分が居たことを知るかもしれない。人間が呼吸出来る大気を持った惑星がここにある。大きな犠牲を払った探検だが、いつかここに街が出来るかもしれない。そう思うことが、せめてもの救いだ。

　マイロの腹が鳴った。こんな状況でも腹が減るとは。最後の食事が雪球か。マイロは、もう一度雪を掴もうとした。指の先に何かが当たった。平らで角がある。大きさは、拳ほど。それは、透き通った立方体だった。

　立方体は、マイロの手の中で光り始めた。暖かい、温度が急激に上がって行く。体が程よく暖まり、周囲の雪が融けはじめた。足が動く。マイロは、立ち上がった。すると、立方体が強烈な光を放った。

　反射的に立方体を手放した。雪の上に落ちたそれは、赤く燃えるような色に変化した。それが雪を融かして行く。足元の雪が流れ、下からシングルベッド大のガラスが現れた。それは、直方体の容器のようだ。中には、緑色の液体で満たされていた。

　マイロは、膝をついて中を覗いた。そのとき、ガラスに亀裂が入り砕け散った。マイロは、逃げる間もなく液体の中に沈んだ。逃れようとしてもがくマイロの口と鼻は、液体に満たされ呼吸が出来ない。

「落ち着いて。ゆっくり息をして。液体を呼吸するのよ」

　どこかで聞いたことがある声だ。マイロは、大きく息を吸い込んだ。肺が液体で満たされたが、苦痛を感じなかった。

「そう、それで良いのよ。力を抜いて」

　全身の力を抜いたマイロは、体が浮くのを感じた。そして、急速に落下。全身に付いた液体のせいで何も見えないが、急降下していることは分かる。落下による加速は数秒間続き、やがてゆるやかな滑り台を下りる程度に減速した。

　ついに落下が止まり、薄暗く硬い地面の上に着いた。液体が体から離れていく。床に流れたそれは、垂直に伸びた。液体は、ゲル状に変化し、更に動きながら硬い物体に変化しようとしている。

　ゲル状の中に白い骨が形作られていく。人体の骨格標本のようだ。骨格が完成すると肉がそれを覆い、最後に皮膚が形成された。それは、緑のゲルが消えて現れたのは、何も身に着けていない美しい女性だった。

　その女性は、マイロの腰に手を回しキスをした。その感触は、間違いなく人間のそれだった。彼女は、キスをしたまま片手を天に上げた。周囲が真昼のように明るくなり、風景がマイロの目に飛び込んできた。それは、クリスタルのように輝く宮殿だった。

「さあ、こちらへ」

　女性は、マイロの手を取って宮殿に導いた。木も草も何もかも白い庭園は、まるで全てが凍結しているようだ。二人は、白い芝の上に座った。マイロは、女性の目を見て言った。
「これは、どういうことだ。君は、いったい何者だ」
「私は、シュメーリル。そう呼ばれていたわ。あなたは、マイロと呼ばれていた」
「なぜ、僕の名を知っているのだ」
「ずっと昔、あなたの半覚醒精神に感応した。私の心にあなたが答えてきた」

　シュメーリルは、手を彼の胸に当てた。その手は、上着を通り抜け肌に触れた。全身の力が抜けていく。彼女の手は、胸から脇へ、そして背中に触れて止まった。彼女の脚がマイロの脚に絡みつく。軟らかく少し冷たい感触が、マイロの唇を覆いつくし二人の体が融合していく。マイロは、全身にシュメーリルの肉体と精神を感じながら言った。

「ここは、どこなんだ。そして、君は何をしようとしている」
「聞いてどうするの。ここには、あなたと私だけ。二人とも故郷に帰るすべをなくしている」
「それは、そうだけど。君のことを知りたい」
「この星は、流刑者の地だったのよ。そして、忘れ去られた。私は、流刑者の最後の子孫。原因不明の病気が広がり、私だけが生き残った。一人きりになったとき、雪の下に埋もれて誰かが来るのを待つことにしたのよ。体の分子構造を変えて、宇宙に精神を飛ばして反応を待った。600年前、遭難した宇宙船から反応があった」

　マイロは、冬眠から覚醒する前に見た夢を思い出した。
「そうか、あれは君の仕業だったのか」
「そう、船は私の念波に誘導されて到着したのよ」
「299人を犠牲にしてね。なぜ、そんなことをしたんだ」
「寂しかった。ただ、それだけ。でも、あなたに逢えたから寂しくないわ。」
「シュメーリル」
「マイロ」

　雪に埋もれた宇宙船ルコイライの傍に、小型の宇宙船が着陸していた。四人の宇宙服を着た人間が、緑の塊の周りを囲んでいる。一人がゲル状の塊をかき分けた。中には、穏やかな顔をしたマイロの姿があった。
「死んでいますね」
「凍死なのか。」
「いいえ、一酸化炭素中毒のようです」
「よし、捜索終了。ルコイライ乗員の全員死亡を確認した」

　捜索隊が飛び去った後、シュメーリルとマイロの上に雪が、包むように降り積もり、周囲の雪原と同化していく。

　　　　　　　　　　　　　　　　完